

化学教育 徒然草

ジェンダード・イノベーション

AIDA Misako

相田美砂子

広島大学 特命教授
2022~2023 年度 日本化学会 副会長



巻頭言

Gendered Innovations には、ぴったりした日本語訳がないため、ジェンダード・イノベーションと記されることが多い。第6期科学技術・イノベーション基本計画では、この言葉の説明として、『科学や技術に性差の視点を取り込むことによって創出されるイノベーション』と脚注に記されている。第5次男女共同参画基本計画では、「第4分野」(科学技術・学術における男女共同参画の推進)に、『男性の視点で行われてきた研究や開発プロセスを経た研究成果は、女性には必ずしも当てはまらず、社会に悪影響を及ぼす場合もある。体格や身体の構造と機能の違い、加齢に伴う変化など、性差等を考慮した研究・技術開発が求められる。これはイノベーションの創出にもつながる。』と記されている。「無意識の思いこみ」unconscious biasを排除し、多様な視点や発想が取り入れられる社会の実現が必要であることは言うまでもないが、研究の現場においても、ジェンダー平等を実現し、多様な視点や発想を研究に取り入れていくことが必要なのである。

国立大学の入学者(2012~2021)における分野別・男女別・出身地別の傾向は、この10年間で全く変わっていないことがわかった¹⁾。学部入学者の男女比は、ほぼ2:1、男性の5割以上が理工系、女性は教育系と保健系が多い。理工系の全学生の内、約8割を男性が占めている。しかも、このような分野別・男女別の傾向に、出身都道府県による違いがほとんどない。

最近、理工系学部での入試において女子枠が設置されたり、国立大学法人10大学理学部長会議声明(ジェンダーバランスの課題に取り組むことを宣言)が出されたりしている。これらによって、初等・中等教育の場や家庭において「無意識の思いこみ」の存在が認識され、その影響が最小限に抑えられていくことを期待したい。社会だけでなく、研究におけるダイバーシティの確保、そして、ジェンダード・イノベーション創出に向けて、より質の高い研究・技術革新の実現のために、今、必要な取り組みは何であろうか。ご意見をお寄せいただきたい。

1) 相田美砂子, 学術の動向 2022, 27 (11), 18.

[連絡先]

739-8511 広島県東広島市鏡山1-3-2 (勤務先)